

日中社会学会第20回大会プログラム

開催日：6月7日（土）・6月8日（日）
会場：流通経済大学・新松戸キャンパス（5階・6階）
（JR 新松戸駅から徒歩4分）

（注）プログラムは一部変更となる場合があります。

当日会場にて配布される資料でご確認ください。

第1日 6月7日（土）

12：00～ 受 付

13：00～13：05 開会式（5階503教室）

中村則弘 会長挨拶

司 会 首藤明和（兵庫教育大学）

13：10～14：20 特別講演「中国歴代の社会変動と環境」（5階503教室）

原 宗子（流通経済大学）

司 会 根橋正一（流通経済大学）

14：30～16：30 シンポジウム PART1「現代中国の環境変動と人の移動」（5階503教室）

報告者

浜本篤史（名古屋市立大学） 「中国・三峡ダム開発と立ち退き移転者」

包 智明（中央民族大学） 「中国内モンゴルにおける砂漠化と生態移民」

洪 波 （福建華僑大学） 「グローバリゼーション下の中国におけるエコツーリズム」

コメンテーター

西原和久（名古屋大学大学院）

東 美晴（流通経済大学）

司 会 浅野慎一（神戸大学）

16：35～17：30 総 会（5階503教室）

18：00～20：00 懇親会（会場：3F 銀座スエヒロ）

受付の近くにて

- 論著資料の配布コーナー（論文の抜刷やコピー、調査報告書などの配布）
- 書籍販売コーナー（著者割引での販売など）
- 中国の大学・研究機関紹介コーナー（資料やコピーなどを置いておく）
- その他（若手研究者の自己アピール、他学会の紹介、中国・欧米の研究動向の紹介など）

第2日 6月8日(日)

9:00～ 受付

9:30～12:00 一般自由報告(6階603教室)

司 会 長田 洋司(早稲田大学)

- 1) 松木孝文(名古屋大学大学院)
「日本の地方都市における中国人技術研修生・実習生—四国瀬戸内沿岸地域の実地調査に基づいて」
- 2) 鄭南(中部学院大学)・曹陽(撫順社会科学院)
「社区住民の生活と家族・親族ネットワーク—撫順市での住民調査を通して」
- 3) 斎藤あつ子(早稲田大学大学院)
「『廃都』に隠された国民国家誕生の思想—「me」としてのオクシデンタリズム」
- 4) 吳偉明(香港中文大学)
「『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって——日本ホラー映画要素の香港化について」
- 5) 宮田紀靖(瀋陽師範学院)
「中国の2008年現在——国家社会主義と民主主義をめぐる諸問題【オリンピック関係】」

13:10～14:40 ミニシンポ(5階503教室)

「チャイニーズネスとトランスナショナルアイデンティティ」

コーディネーター 永野 武(松山大学)

報告者 梶山 新(筑波大学)「中国におけるエスニックネーションの起源」

南 誠(京都大学)「中国帰国者」の歴史/社会形成」

14:50～16:50 シンポジウム PART2(5階503教室)

「東アジア研究の批判的検討と今後の可能性——個性と普遍のせめぎあいから」

基調報告 王 向華(香港大学)

司 会 首藤明和(兵庫教育大学)

討論者(五十音順)

東 美晴(流通経済大学)

石井健一(筑波大学)

吳 偉明(香港中文大学)

黒田由彦(名古屋大学)

陳 立行(日本福祉大学)

中村則弘(愛媛大学)

根橋正一(流通経済大学)

16:50～17:00 閉会のあいさつ(5階503教室)

大会担当理事 浅野慎一(神戸大学)・西原和久(名古屋大学)

大会実行委員 根橋正一(流通経済大学)・東美晴(流通経済大学)

■日中社会学会第20回大会（6月7日・8日）・会場へのアクセス



- JR 武蔵野線
南浦和駅より 30 分
西船橋駅より 20 分
- JR 常磐線
上野駅より 30 分
- JR 武蔵野線・常磐線
新松戸駅より徒歩 4 分

■ホテル

新松戸キャンパスは都内（上野）から 30 分の場所にありますが、新松戸に宿泊される場合には、新松戸ステーションホテルの割引宿泊が可能です。宿泊を希望される場合は、大会実行委員に一週間前までにご連絡下さい。

○新松戸ステーションホテル

- ・〒270-0034 千葉県松戸市新松戸 2-120
- ・TEL 047-343-7111 FAX 047-343-7117
- ・料金：シングル 8,196 円 → 6,550 円
ツイン 14,700 円 → 11,760 円
- ・立地：新松戸駅より徒歩 1 分

〈第 20 回大会開催要項〉

日時：2008 年 6 月 7 日・8 日

会場：千葉県松戸市

流通経済大学新松戸キャンパス

参加費：一 般 2000 円

学 生 1000 円

非会員 2000 円

懇親会費：5000 円（一般）

2500 円（学生・退職者ほか）

懇親会会場：銀座スエヒロ

（流通経済大学新松戸キャンパス内）

■日中社会学会大会 20 回記念大会にあたって

中村則弘（日中社会学会会長）

日中社会学会大会が始まったのは、もはやふた昔も前のこととなった。喜ばしい限りである。一方で、この大会が、30 回、40 回の記念大会に向けた新たな出発点となることを祈念してやまない。

思い起こせば、1 回大会は福武直の記念講演「中国研究 30 年の回顧と展望」で幕をあげた。確か 1 日の日程で、報告者は数人であったと記憶している。それから 20 回を重ねたわけである。会場設定、講演者手配、報告準備、会報作成などをめぐる草創期の辛苦が、走馬灯のようによみがえる。日中社会学叢書の「刊行にあたって」でも記したが、歴代の会長・事務局長・各理事のひとかたならぬ努力があつて、現在に至ることができたと実感している。この場を借り、福武直先生、青井和夫先生、宮城宏先生、根橋正一先生、石川晃弘先生、安原茂先生、そして塩原勉先生に心からお礼を申し上げたい。また、元理事の方々にも心から感謝いたしたい。

歴代の方々に思いをはせつつ、これからを担う若手諸氏に強くお伝えしたいことがある。それは本学会が、会員の「志」と「思い」に大きく支えられてきたことである。大会運営はもとより、研究集会の開催、紀要・ワーキングペーパー、さらには関連叢書の刊行にいたる事業の展開はまさにそうであった。将来を担う若手を育てることに重きをおく方針が貫徹できたこともそうであった、とりわけ後者は、本学会の創設以来の方針であり、これからは堅持すべきと考えている。しかし、このような運営のあり方が、「志」と「思い」を共有する中堅以上の方に、大きな負担をかけてきたことも事実なのである。目先の利益に左右されたならば、こうした方針を維持できるはずもなかったことは、身をもって経験している。

近年の学術研究をとりまく環境をみると、どうにもせちがなく、とりわけ若手を目先のことに囚われがちにさせている。蛸が自分の足を食べるが如く、学術活動の基盤をも崩すのではという危惧すら覚えている。そのような状況であればこそ、日中社会学会の存在意味は大きいと思えてならない。若手諸氏には、この状況を見据えつつ腹を据えて本学会の活動を支え、それを超えた新たな時代を拓くことを切に望みたい。

古参会員の老婆心からの叱咤はこれくらいとし、多彩な特集シンポ、書評シンポ、記念講演、自由報告など、日中社会学会なりの形ができ上がってきたように思う。これもまたうれしいことである。ただ考えてみれば、本学会の大会では、シンポジウムと記念講演の比重が高い。これらの事前準備は理事や事務局に、他学会では思いもよらない膨大な作業を課していることも事実である。準備のために奔走しておられる理事、事務局に感謝の意を表したい。

苦労は多いが、時代はわれわれの活動のさらなる進展を求めていると確信している。一方で、われわれがトランスナショナルな学会を目指し取り組むべき課題は数知れない。とりあえずでも、中日社会学会との共同プロジェクトの推進、中国での研究集会の定期開催、中国における研究者のネットワーキング、類例をみない形でのワーキングペーパーの刊行、新たな形での叢書出版など、差し当たりのものも山積みである。そのなかにあつて、改めてこの 20 回大会を、とりわけ若手諸氏に向けた新たな出発点と位置付け、われわれの決意を新たにしたいのである。大会開催に関する大会担当理事、研究担当理事、事務局からの企画や情報に接する限り、その最適の機会と断言できそうである。

■日中社会学会第20回大会をお受けするにあたって

根橋 正一

(第20回大会実行委員長・流通経済大学)

東 美晴

(第20回大会実行委員・流通経済大学)

今回の大会は日中社会学会20周年の記念大会となります。気軽にお引き受けしたものの、実際に大会が近づくにつれ、果たして20周年にふさわしい大会を開催することができるのか、プレッシャーがどんどん大きくなっております。

20年前、日本社会学会大会に乗じて総会を開催していた日中社会学会の、独自の研究大会は早稲田大学で開催されました。当時、中国は改革開放に突き進む時期で、開放的な雰囲気満ちており、日本の社会学研究者たちの2～3のグループの現地調査も始まっていました。日中双方の社会学者の共同研究もスタートしていました。しかし、この自由は天安門事件ともつながっていました。1989年6月4日、天安門広場に座り込んだ市民・学生の中に戦車が突入するニュース映像を繰り返し見た翌日、私たちは日中社会学会第1回大会のために早稲田大学に集まったのでした。それ以来、中国社会の様々な変化を身近に感じつつ、本学会大会も20回を迎えることになりました。流通経済大学での開催は2回目になります。前回は青井和夫元会長の下、茨城県龍ヶ崎キャンパスでしたが、今回は千葉県新松戸キャンパスで、皆様をお迎えいたします。

さて、今年は奇しくも北京オリンピックが開催される年でもあります。それにもかかわらず、1月末には毒物混入餃子事件は、日中関係に今までの政治的文脈とは異なる形で問題を投げかけることとなりました。さらに、3月にはラサにおいて発生したデモを発端に、中国―チベット間の関係は世界的関心事になりました。その結果、聖火リレーは、チベット独立支持者と中国系住民との間において、人権か愛国かを表現する政治の舞台となりました。

これら一連の動向が反映するものは、グローバル化する経済を背景に再編された国社会の現実、すなわち民族あるいは都市・農村間の格差、急激な近代化のツケとしての環境問題などであると考えています。また、これは中国と他の国々との間に大量のモノや情報が相互に顔が見えないままに行き交う現実を作り出し、いかに信頼関係を構築するかという問題を投げかけます。

今回の大会では、グローバル化する経済の下での中国を照射することを目的に、環境と移動を最初のシンポジウムのテーマといたしました。また、移動のテーマはミニシンポにおいて、形と角度を変え再度、議論されることとなります。さらに、最後のシンポジウムにおいては、中国という枠を越え、東アジア全体を視野に入れたディスカッションが行われることになっております。未来を見据えた、意味深い討論がなされることを願っています。

■日中社会学会第20回大会の開催にあたって

浅野慎一（大会担当理事）

6月7～8日、流通経済大学(新松戸キャンパス)におきまして、第20回大会が開催されます。

今回は第20回の記念大会でもあり、特別記念講演として原宗子先生に中国の環境問題について、歴史社会学の視野から、雄大かつ縦横に語っていただきます。

原先生のご講演を受け、シンポジウム(PART1)「現代中国の環境変動と人の移動」を開催します。現在、中国における環境問題、および人の移動は、世界的にも最も注目を集めている二大テーマといえるでしょう。しかもこの二つのテーマは、極めて密接に関連しあっています。それはいずれも極めて中国的であると同時に、中国発のグローバルな社会現象でもあります。クロスオーバーする二つのテーマから、中国社会と世界社会を把握する新たなパースペクティブが生み出されることを期待しています。

大会二日目には、王向華先生に基調報告をいただき、シンポジウム(PART2)「東アジア研究の批判的検討と今後の課題—個性と普遍のせめぎあいから」を行います。今日、日中社会学も単なる日本と中国の二国間関係・比較だけにとどまらず、東アジア社会を把握するトランスナショナルなまなざしが求められています。「中国的」、「日本的」、そして「東アジア的」な個性とその基底を貫く普遍性をどのように捉えるか、刺激的な議論がなされることを期待しています。また、自由報告も予定しています。ご期待ください。

会員諸氏の積極的な参加をいただき、今回の第20回大会が実り多きものとなりますよう、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。